

三浦左衛門盛清、若君の御供仕り酒田へ行く事

さても、積もる月日は重なりて、はや若君は七歳にぞなり給う。盛清心に思うよう、なかなかここにありとも我一人の事なれば思案を廻し候とも叶うべきとは思われず、庄内酒田、神林常勤は父盛長殿に所縁の人なれば、酒田へ立ち越え常勤を頼まばやと思ひ定め、若君に申し上げるは、庄内酒田と申す処にこそ、神林常勤と申す者の候なり、父上様と所縁の人にて御座します、一先庄内へ立ち越え常勤を頼み申さん、と存ずるなり、いかが思し召し候や、と申しける。

千代若聞こし召し、汝、世になき我を左程に思う事のうれしさよ、この上は兎も角もと仰せける。その時、左衛門申しけるは、憚りながら左様の御姿にては人の見る目もいかが、と存ずるなり、御髪を下し給いて御出で遊ばされしかるべし、と申し上げる。

若君聞こし召し、汝が申す所尤なり、さあらば、元服申さんとて吉日を選び、男に成り給い、則ち御名をば三浦五郎盛末と名乗りける。この上は片時も急ぐべしと仰せられければ、左衛門尉、畏みて、頃は二月中旬に御坊主に暇を乞い、沢の寺を立ち出で、庄内さして急ぎ給うぞ哀れなり。

人目を包む旅なれば、菅の小笠をまぶかに召し、盛清一人御供にして、たどるもどろと歩みつつ、昼は人目のしければ、あなたこなたとさまよつて、ようよう急げば程もなく荒谷の渡りに着き給う。

浜辺はるかに歩み行く、我が身の安否を松が崎、いつか帰りて本庄の渡りを越えて詠むれば、浜辺に遊ぶ小夜千鳥、沖のかもめの立ちさわぎ、蟹の営み浪間より、渚に帰る釣小舟、沖へ漕ぎ出る舟もあり、あと見返りて詠むれば、故郷も恋し金浦や、行くは程なく象潟の、干満禪寺を伏し拝み、父精靈頓証菩提と回向して、南無や遍照大師、碇音に聞きつる庄内の酒田にこそは着きにける。

若君を有る方へ立ち忍ばせ参らせて、左衛門尉は神林が屋形へ参り、案内こうて内に入り、常勤に対面し、真、斯の次第にて盛長の御息、貴方の憐愍蒙らんためこれまで御供申すなり、万事は頼み存ずる、と申しければ、常勤承り、遠路能くこそ御越しなされ候もの哉、此方へ御入り候え、と若君と諸共に奥の一間に、招じつつ能きに労わり奉る。

この人々、酒田にて月日を送り、時節を待ち居たりしは哀れなりける次第なり。かの人々のありさまを、哀しまざらぬはなかりける。

神林常勤、湊へ下りし事

さるほどに、常勤は二人の人々に申されけるは、いかに人々聞き給え、某秋田へ立ち越えて、内々、城之助殿へ、盛長殿誤りなき段申し訳してみばや、と思うなり、いかが、と申しければ、人々聞き給い、これは近頃、忝き次第に存ずるなり、ともかくも、貴方よろしく頼み入るぞ仰せける。